「英語多読」活動報告
―周南公立大学図書館多読コーナー新設の背景・経緯から現在まで―

西村　浩子

要旨

周南公立大学（以下、本学）では、2023 年 6 月に英語多読コーナー（以下、多読コーナー）を新設した。英語多読（以下、多読）は、「辞書は引かない」「わからないところは飛ばす」「合わないと思ったら投げる」という「多読三原則」（酒井 , 2002）に従って文字通り大量に英語を読む学習法である。多読は、英語を英語のまま（の語順で）理解できるようになる方法として、日本の多くの大学で採用されている。本稿は、第二言語習得論の観点から多読が英語習得に効果的であるとされるその理論背景、多読コーナー新設に至った経緯と当該コーナーの運用ならびに利用状況、学生への多読推奨などについて報告する。収集したデータからは、2024 年度末時点、蔵書・利用者共に増加していることが示された。一方で、適切な読み方の周知や多読資料の不足などが今後の課題として抽出された。

キーワード : 英語多読、英語習得、英語処理効率、図書館

1. はじめに

英語を外国語として学ぶ（English as a foreign language : EFL）環境にある我が国にいながら英語への十分な遭遇を叶える手段として、近年、多読が注目を浴びており、多くの大学で取り入れられている。本学においても、2023 年 6 月に図書館に多読コーナーを新設し、学生を始め地域の人々にも多読を提供できる環境整備を進めている。本報告書では、多読の理論背景、多読コーナー新設までの経緯・運用・利用状況、学生への多読の推奨などについて報告する。これにより、多読ならびに本学の多読コーナーへの理解・関心の促進となることを期待するものである。さらに、今後多読を進めるに当たっての課題や示唆についても述べる。

本報告書は次のような構成となっている。第 2 章では日本語母語話者が英語を習得することの難しさについて触れ、多読がその解決策の一つとなる理由を学習面と理論面から述べる。続く第 3 章では、本学における多読に関し、多読コーナー新設、当該コーナーの運用や利用状況について図書館と授業等の 2 つの面から紹介・報告する。第 4 章は、これらを基に今後への課題と示唆を述べる。

2. 多読の理論背景

2.1 日本語母語話者の英語習得の難しさ

アメリカ合衆国国務省の FSI (The Foreign Service Institute; アメリカの外交官や政府職員を養成する研修を行う機関) が発表した英語母語話者にとっての「言語習得難易度ランク (Language Learning Difficulty for English Speakers) 」(Effective Language Learning) によると、日本語は最も高難易度の言語に位置付けられており、日本語と英語の言語間距離が大きいことが示されている。また、子どもが母語を習得するのに必要とされる時間は、約 35,040 時間とされるのに対し、わが国における中学校・高等学校の英語授業（概算）は 3,065 時間（門田 , 2012）である。英語母語話者は文脈内で自然な英語表現に大量に触れる（これにより言語を習得 [cf. Tomasello, 2003]）ことができるが、我が国は EFL 環境下であり、一般的に自然な英語に遭遇する機会は限られている。これらのことから、日本語を母語とする英語学習者が英語を習得するには、学校の授業外でも英語に触れる必要があると言える。その際、上述した不足の時間を補うべく大量に、そして自然な（authentic）英語に触れることが大切である。

2.2 英語学習と多読

2.2.1 二つの英語学習法

英語の学習法は、大きく「意味重視の学習」と「言語重視の学習」の二つに分けられる（中田 , 2023; 他にも「帰納法」と「演繹法」という分け方もある [門田･髙瀬･川﨑, 2021]）。意味重視の学習は、文脈から自然に英語を習得する学習で、英語の読書や映画鑑賞、会話での英語使用などがその学習手段として挙げられる。一方、言語重視の学習は、英語の単語や文法など英語自体に焦点を当てそれらを意識的に学ぶ学習で、英単語の暗記、文法書で文法を学習し、構造を分析したり問題を解いたりする、などがその学習手段である（中田 , 2024）。紙幅の制限により詳細は割愛するが、これらの学習法にはそれぞれ一長一短あるとされる。意味重視学習により習得さ

表 1　精読と多読の比較 (Chart contrasting intensive and extensive reading. [Day & Bamford, 1998, p. 123]) を基に筆者作成

精読	読み方	多読
正確に読む	授業の目標	流暢に読む
翻訳する 設問に解答する	読む目的	情報を得る 楽しむ
単語と発音	焦点	意味、内容
しばしば難しい 教員が選択	読む素材	簡単なもの 学習者が選ぶ
多くない	読む量	多い
遅い	読む速度	速い
最後まで読み終える 辞書を使用する	読み方	面白くなければ途中でもやめる 辞書は使わない

れた知識は、実際のコミュニケーションで使いやすいというメリットがあり、多読は意味重視学習に含まれる（時間がかかることがデメリットとされる）。

2.2.2 多読の特徴と多読指導

EFL 環境下で自然な英語への大量な遭遇を叶える意味重視の学習法として、その効果が注目されているのが多読である（中田 , 2024）。多読は、学習者が自分にとって適したレベルの「面白い」と思える本を大量に読む、というシンプルな活動（Nation & Waring, 2020）と定義され、文法に注目したり、第一言語に訳したりして読む読解（「精読」）とは性質が異なる（表 1）。

多読は表1に示したような特徴を持つ。すなわち、精読が「英語から日本語への暗号解読」（髙瀬 , 2010）であるのに対し、多読は「英語を読む」活動といえる。多読の指導には、以下の Day and Bamford (2002) の多読指導を行うための 10 か条が参考になる。

1. 読む素材（多読資料）は易しいものである。
2. 広範なトピックの多様な種類の多読資料が利用できること。
3. 学習者が読みたいものを（自分で）選択する。
4. 学習者はできる限りたくさん読む。
5. 読む目的は楽しみ、情報収集、一般的な理解に関連すること。
6. 読書はそれ自体に意味がある。
7. 読む速度は普通遅いというよりはむしろ速い。
8. 読書は個々で黙読すること。
9. 教師は学習者の方向付けを案内し導く。
10. 教師は読者のモデルである。

（Day & Bamford, 2002, 136–140 を基に筆者訳）

この 10 か条は指導する際に役立つ内容であるが、日本語を母語とする英語学習者に示す約束事としては次の「多読三原則」（酒井 , 2002）が広く支持されている。

多読三原則

1. 辞書は引かない（英語のまま読む、辞書を引かなくてもいいくらい、やさしい絵本から始める）
2. わからないところは飛ばす（わからない単語・文・段落があっても絵や文脈から推測して読む）
3. 合わないと思ったら投げる（飛ばしているうちに意味が分からなくなったり、面白くなくなったりしたら読むのをやめて楽しめそうな本を読む）

どのくらい「易しい」絵本から読むのか、については、一番良いのは 1 ページに数語（例 : 1 語や 2 語）の絵本（多読資料）からとされている。多読は、極めて易しい多読資料から読み始め、漸進的に読むレベルを上げながら長期間継続して大量に読む学習法である（母語習得と同じプロセスを辿る）。これにより、これまでとは異なる「読み方」（すなわち、英語の語順のまま、英語のまま読む読み方）が習得される。この規則に従って多読をはじめた学習者は（英語に苦手意識を持っていた社会人も含め）次々とペーパーバックを楽しめる域に到達したとの報告（酒井 , 2002）がされている。酒井 (2002) は、多読の一つの大きな目標値として 100 万語を掲げている。

2.2.3 多読の効果をもたらす理論背景

多読が効果的である様々な理由の中から認知面と語彙面について（紙幅の制限上簡単に）論じる。

●認知処理面

文字を読み、読解する際には読み手は図1のような処理を行っている（門田ほか , 2021）。母語の場合は、文字

図 1　黙読の処理プロセス（門田ほか , 2021 の序章を参考に筆者作成）

文字知覚（視覚認知） ⇒ （心内で）文字を音に変換（音韻符号化） ⇒ 意味理解

知覚と音韻符号化が自動化（認知資源を使用せず反射的に処理される状態）されているため、認知資源を全て意味理解に使用できる。一方、目標言語（たとえば、日本語母語話者にとっての英語）の場合は、音韻符号化などの処理が自動化に到達していない場合が多い。認知資源は使用できる量に限りがあるため、音韻符号化などの処理負担（の程度）により、意味理解に充てる認知資源が少なくなる。すなわち、この音韻符号化にまつわる処理が自動化に近づくことが流暢な読み手となる鍵となる。多読により音韻符号化の処理を大量に行うことでトレーニングとなり、自動化に効果をもたらすと考えられる。

●語彙面①基本語の習得

表 2 は、BNC（British National Corpus: イギリス英語の実際の書き言葉・話し言葉の大規模な言語データベース）における語の使用頻度上位 50 語である。このリストは、高頻度語は全て基本語であることを示している。英語という言語は、基本の 1,000 語程度で英文の 70~80% を構成していると言われている（藤井 , 2022）。これらの語は、複数の意味を持ち、様々な文脈で繰り返し使用される。多読を通して、自然な文脈内でこれらの語に繰り返し遭遇し処理することで基本語を習得し、またその音韻符号化が自動化に近づくことで処理効率が向上すると考えられる。

●語彙面②定型表現の習得

定型表現とは、高頻度で使用される「複数の語やフレーズの組み合わせ（cf. Wray, 2002）」を指し、「決まり文句」とも言われる。英語では、この定型表現がかなりの割合を占めると言われている（研究者によって 5 割～ 7 割と様々）。定型表現の習得のメリットで主なものは、複数語を一つの塊のように全体で処理できること、伝わりやすさ・理解しやすさの向上、である。多読を通して定型表現への遭遇頻度が高まり、ひいてはその学習・習得につながることが期待される。

2.2.4 多読の読了語数と英語力の向上

多読では、始めた時から読書記録を付けることを強く推奨している。多読資料を読み終えるごとに、読書記録に本のタイトル、YL（Yomiyasusa Level; 3.1.2 参照）、語数、コメント、読了累計語数などを記録する。全くの初心者が各英語習熟度に到達するまでに必要とされる多読読了語数と累計時間の目安を表 3 に示す（Nation & Waring, 2020, p. 64 の一部を参考に筆者作成 ; 数値は概数）。TOEIC® L&R のスコアなどに変化として表れるのは、30 万語読了程度から（Nishizawa, Yoshioka, & Fukada, 2010）、また 200 ～ 300 万語で留学 10 か月に相当する TOEIC® L&R のスコア取得の報告がある（西澤・米澤・粟野 , 2019）。

まとめると、多読は音韻符号化の大量な処理、基本語や定型表現への高頻度の遭遇、それらの処理の自動化促進と習得、（上記以外にも自律的学習者の育成や異文化への遭遇などもある）などさまざまな効果が期待できる。これらは相乗効果を生み、4 技能全てに向上が見られることは研究で報告されているが、その中でも最初にリスニング力にその効果が表れることが報告されている。研究成果から、学習者の目標としてまずは 30 万語読了を強く推奨したい。大きな目標としては、酒井 (2002) が示した 100 万語の達成を目指してほしい (2.2.2 参照)。

表 2　BNC 高頻度語（BNC Word Frequency Lists より筆者作成）

順位	語	順位	語	順位	語	順位	語	順位	語
1	the	11	for	21	not	31	as（接）	41	what
2	be	12	I	22	this	32	we	42	there
3	of	13	that	23	but	33	an	43	all
4	and	14	you	24	from	34	say	44	get
5	a	15	he	25	they	35	will	45	her
6	in	16	on	26	his	36	would	46	make
7	to（不定詞）	17	with	27	that	37	can	47	who
8	have	18	do	28	she	38	if	48	as
9	it	19	at	29	or	39	their	49	out
10	to	20	by	30	which	40	go	50	up

表 3　各英語レベル到達に必要とされる読了語数と累計時間（Nation & Waring, 2020, p.64 の一部を抜粋しそれを基に概数で筆者作成）

	入門	初級	中級	中級上位	上級下位	上級上位
読了語数	約5万語	約14万語	約30万語	約65万語	約155万語	約220万語
累計時間	約10時間	約18時間	約34時間	約73時間	約172時間	約247時間

3. 本学における多読の状況

注）2024 年度の新学部新学科設置による学生数の変化があったが、一部それ以前のデータを含む形で報告する。

3.1 図書館多読コーナー

3.1.1 新設までの経緯と多読コーナー移転・情報発信

本学は、英語学習に力を入れていると謳っているが、現実には 2022 年の時点では学生が英語に触れる環境が十分整っていなかったため、策の一つとして多読の導入を提案した。導入の決断までのプロセスとして、2022 年度の筆者の授業内で試験的に多読（筆者所蔵の多読資料を使用）を取り入れ、受講生からコメントを収集した。その結果、多くの肯定的なコメントが得られたため全学的な導入に踏み切った（学生コメントの例については図書館設置の「多読ガイド」を参照されたい）。

多読コーナー新設に当たっては、図書館長の承認後、総務部長や当時の図書館担当職員、図書館司書の方と協議し、図書館 3 階のピアサポートセンター内の 1 区画を利用することとした。当時、多読資料の所蔵はなかったため、購入を始めとする諸手続きをゼロから進め、多読資料約 600 冊が揃った 2023 年 6 月に全学的にアナウンスした（図 2）。後に図書館 2 階に多読コーナーを移すまでは、ピアサポーターに質問等が出た場合の対応をお願いした。その後、少しずつ蔵書を増やし、2023 年度末の多読資料数は 1,109 冊となった。その少し前に図書館司書の方より、今後の多読資料増加と利用しやすさの面から場所を図書館 2 階に移転する提案を受け、2024 年度 4 月に移転した（図 3）。

移転後、学生への情報提供や関心を喚起するキッカケとなることを狙って、リーダーズの特徴や新たなリーダーズを Yomu Yomu OIC info. (Microsoft365 Teams) や C-learning で発信している。2024 年度までの時点では、「多読資料購入費」としては予算化されていないため、多くの有志の教員からの図書費の協力や図書館担当職員のやりくり、2024 年 11 月には日本多読学会を通し関連団体からの寄贈があり、現在の数まで蔵書が増えた（表 4）。一般的に大学全体として多読を進める目安とされる最低冊数の 3,000~4,000 冊にあと少しという段階まで来ている状態である。

3.1.2 多読資料（選書・登録・配架・案内）

多読は 1 冊が数ページの薄い絵本から読み始め（例：全 8 ページ、10 語、YL 0.1; YL については「選書」の記述参照）、非常にゆっくりレベルを上げていく（本学では、多読初期のレベル上げは図 4 のように指導している）。このセクションでは、多読資料の選書から配架までの流れ、設置している案内などについて紹介・報告する。

●選書（主な担当 : 筆者）

当然のことであるが、多読に最も重要なのは、学習者に適したレベルの多読資料が利用できることである。多読資料のレベルの判断に非常に参考となるのは、日本多読学会が日本語を母語とする英語学習者向けに独自で設

図 2　新設当時の多読コーナー（2023 年 6 月）

図 3　2024 年度多読コーナー移転（図書館 2 階）

表 4 多読資料数推移（単位：冊）

	2023年度	*2024年度
蔵書数	1,109	**2,483

注）*2025 年 2 月 28 日現在； ** 展示 DVD、多読関連資料 5 冊含む

定している YL（読みやすさレベル；YL [0.0（易）～ 10.0（難）]）である（cf. 英語を母語としない学習者の目標目安：YL4.0 程度がすらすらと読めれば十分）。原則として、（社会人も含め英語圏で育った経験がない人は）誰もが YL0.1 から読み始めるべきとされている。本学では、2024 年度より入学生全員に多読を案内しているが、ほぼ全員が多読初心者である。このことを踏まえ、2024 年度前期までは YL0.1~0.6 あたりを重点的に選書し、後期以降は YL0.7 以上も追加していった。一部、多読を継続し YL1.1 ～ YL3.0 あたりを読んでいる学生もいるため、学生の多読状況を確認しながら適したレベルの多読資料が不足しないよう留意して選書している。選書は、研究者ネットワークからの情報などを基に、評判が良いものをジャンルが偏らないように配慮して行っている。

●発注から配架まで（担当：図書館司書の方々）

選書の際、書誌情報に総語数・YL などの情報を追加したリストを作成し、図書館司書の方に発注作業を依頼する。多読資料は洋書であるため、欠品も多く、また実際に受け入れになるまで数か月要する場合がほとんどである。一般の書籍の場合は、受け入れ後、目録整備、必要に応じて目録の確認・修正の処理の後、配架となるが、多読資料に関しては YL を示す色シール（図 4）や YL・語数・リーダーズ名を掲載した図書ラベル（図 5）など独自の装備を経て配架となる。

この多読資料独自の装備は大変な手間であるが、このおかげで利用者は YL や語数を瞬時に把握できるという大きなメリットがある。この使いやすさは、多読の促進につながっていると思われる（図書館司書の方談）。具体的には、語数は読了語数の積み上げの動機付けとなり、色シールは背表紙を見ただけで一目で自分に適した多読資料の場所を判断する手助けとなっている（実際、他の図書館で多読資料を見つけても語数や YL が分からず、読むのを断念した、というコメントを複数耳にしている）。

●多読コーナー設置の案内など

誰でも多読が始められ、継続できるよう掲示や案内物等を置いている。

- 「多読をはじめよう！周南公立大学多読ガイド」（掲示物：特に初心者～ YL1.0 までの読者向けの情報を掲載）
- 「読了語数約 15 万語以上になったら」（掲示物：YL1.1 以上の読者向け）
- 「多読ガイド」（案内リーフレット；多読の方法・学生コメント入り）
- 「100 万語達成ルートマップ」（コスモピアより許可を得て掲示）
- NPO 多言語多読「はじめよう！英語多読」（冊子）
- 読書記録用紙（Reading Record; 1 枚に 20 冊記録できるようになっている）
- 読書記録用紙提出箱（20 冊記入が終わったら提出→筆者が回収し集計）
- Oxford Reading Tree 主要登場人物紹介（掲示）
- 各リーダーズの簡単な紹介や読了語数どの程度から読んだらいいかについての POP
- 各種館内イベント案内（cf. 3.1.4）

3.1.3 図書館利用実績

年間の図書館貸出（表 5, 図 6）と月別の図書館多読資料の貸出実績（表 6, 7, 図 7, 8）を以下に示す（図 6、図 7, 8 はそれぞれ表 5、表 6, 7 の図示化）。3.1.2 の冒頭で述べたように、多読初期に読む本は数語の薄い本であるため、借りて読むというよりは、多読コーナーで読むケースがほとんどである。そのため、貸出冊数（表 5, 図 6）は多読資料利用の全容を示しているとは言い難いが、それでも多読資料の貸出数は図書館貸出全体においてかなりの割合を占めていることが分かる（多読の読了冊数の具体的な数字は、3.2.2 を参照されたい）。

2023 年度と 2024 年度（2 月末まで）における図書館の多読資料の月別の貸出実績（表 6, 7, 図 7, 8）から今年度に入り多読資料貸出数の顕著な伸びが確認できる。

図 4　YL1.0 までのレベル上げの多読読書量目安

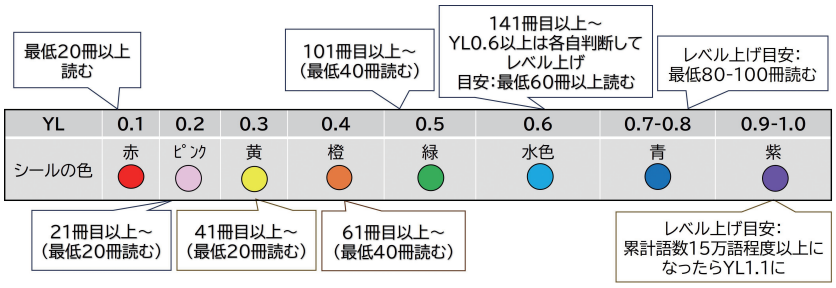
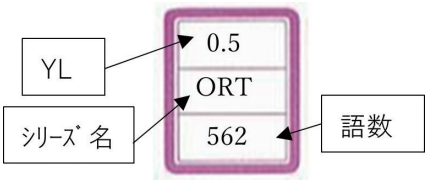


図 5　多読用図書ラベル（枠の色：紫）



8~9 月また 2 月に貸出冊数の減少が見られるが、これは長期休暇（のため図書館に来館しにくい）の影響と推察される。また、2024 年度の前期と後期で比較した場合、後期の方が冊数が少なくなっている一因として、読む多読資料のレベルが上がったことが考えられる。すなわち、順調に多読を継続した場合、後期になるにつれて 1 冊の語数がより多い資料へと移行することが想定され、それが冊数に反映されていると考えられる。

3.1.4 多読コーナーイベント・館内展示（2024 年度）

多読の促進や利用者数の増加を受け、2024 年度は以下のイベントを実施した。以下に各イベントの内容と（分かる範囲での）実績を示す。各イベントに際しては、ポスターや POP など（図書館担当職員、図書館司書の方々により作成）で周知した。筆者の印象では、予想以上に盛況だったのは、「秋の多読短距離マラソン」である。全般的には、各種イベントの実施により季節を感じなが

表 5　図書館貸出実績（単位 : 冊）

	2022年度	2023年度	*2024年度
全体	2,827	3,771	7,851
多読		479	2,758
多読以外	2,827	3,292	5,093

注）*2025 年 2 月 28 日現在

図 6　図書館貸出実績（単位 : 冊）

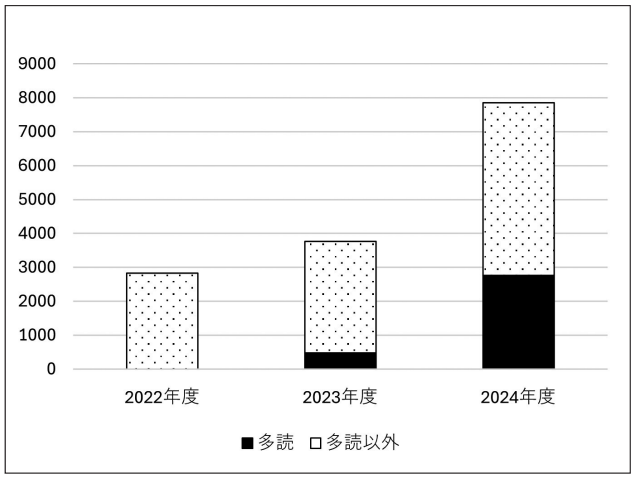


表 6　2023 年度多読資料貸出実績（各月）（単位 : 冊）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
合計	4	37	57	36	14	51	39	21	65	66	29	60	479

表 7　2024 年度多読資料貸出実績（各月）（単位 : 冊）　2025 年 2 月 28 日現在

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
合計	419	594	344	342	52	62	418	222	152	135	18		2,758

図 7　2023 年度多読貸出実績（各月）

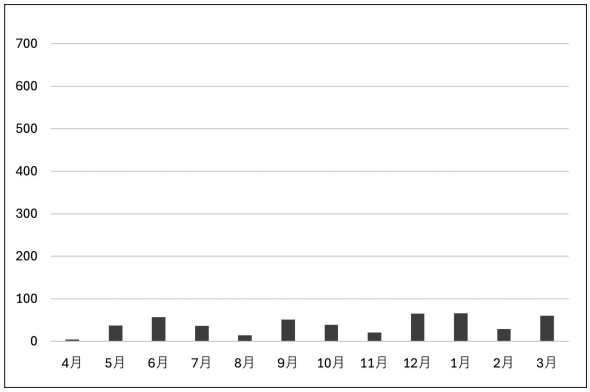
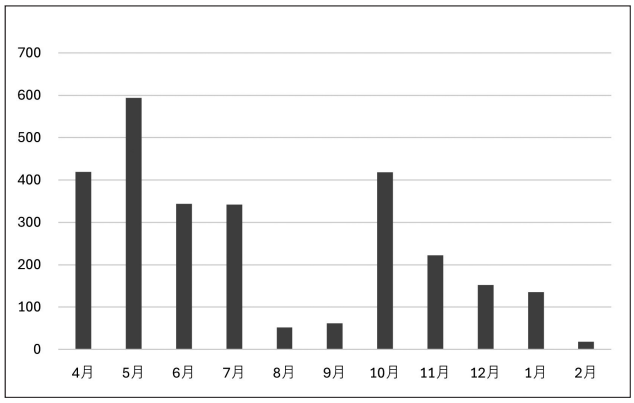


図 8　2024 年度多読貸出実績（各月）



ら多読に触れることができ、よい波及効果をもたらしたと思われる。

● Halloween イベント
- 内容 : 10 月 31 日に多読の本を借りる時 “Trick or Treat?” というと treat プレゼント
- 参加者数（延べ）: 20 人

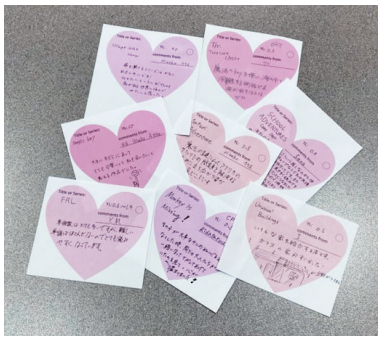
●秋の多読短距離マラソン 2024
- 期間 : 2024 年 11 月 11 日～ 12 月 11 日
- 内容 : 期間中に読んだ多読語数 1 万語以上の学生を対象に上位 10 名に図書カード（1 位 : 2000 円 ; 2 位～ 8 位 : 1000 円 ; 9・10 位 : 500 円）をクリスマスにプレゼント
- 参加者数 : 29 人（cf. 図 9）
- 上位 3 名の読了語数:1 位 58,420 語、2 位 56,468 語、3 位 51,913 語

●多読の木キャンペーン（cf. 図 10）
- 実施期間 : 2024 年 12 月 12 日～ 2025 年 1 月 31 日
- 内容 : 多読コーナーの蔵書でお気に入りや面白かった本（やリーダーズ）のコメントを募集。木に見立ててディスプレイし新年度の入学生が多読を始める時のメッセージとして活用
- 提出枚数 : 70 枚

●館内イベント
- 映画の世界を英語で楽しんでみませんか?（DVD）
  2024 年 5 月 31 日～ 9 月 30 日
- 英語で秋を楽しもう
  2024 年 9 月 30 日～ 12 月 6 日
- 英語で冬を楽しもう
  2024 年 11 月 20 日～ 2025 年 2 月 4 日
- ELF を探そう！クリスマスイベント
  2024 年 12 月 1 日～クリスマス
- 英語で春を楽しもう
  2025 年 2 月 4 日～展開中

図 9　秋の多読短距離マラソン 2024 入賞者ポスター

図 10　多読の木提出コメント例



3.2 学生への多読推奨

3.2.1 学生への周知・指導など

2023 年度の多読コーナー新設以降、少しずつ学生への周知をしていたが、2024 年度から本格的に資料等の配布による案内を始めた（対面の必修英語科目がある学部学科 : 1 年次初回授業時に案内配布 ; 対面授業がない学部学科 : 入学時の資料として配布）。2024 年度は、日本人講師による対面の授業がある英語必修科目では、リマインダを兼ねて学期中複数回読書記録用紙の提出を求めた。読書記録用紙は、20 冊分の記入が完了したら図書館内の読書記録用紙提出箱に提出することとし、筆者が定期的に用紙を回収、適切な読み方ができているかなどを確認した（必要に応じて読み方の指導）。学期末には読了冊数を集計した。

2024 年度入学生より、対面による必修英語科目では、目標がクリアになるように多読の冊数（例 : 前期 100 冊）や語数（例 : YL0.5 以上の人、後期 2 万語）の具体的数値を提示した。資料により語数が多様であるため、多読の実績は読了語数で示すのが一般的であるが、多読初心者に語数目標のみ提示した場合易しいものから読まず語数の多い資料に手を出す（精読になる）恐れがあるため、本学の学生に適した方法として 1 年次前期の目標は冊数提示を採用した。

3.2.2 提出された読書記録用紙に基づく多読資料利用の実績

表 8, 図 11 は読書記録用紙を基にした集計結果（2025 年 2 月末現在）である（図 11 は表 8 の図示化）。多読の性質から、3.1.3 で示した図書館の貸出実績よりも本データの方が多読利用の実態を映し出していると言える。2024 年度に大きな増加が見られる。尚、これらの実績には、筆者の担当授業を含む一部の授業内で行った多読、筆者の研究室の蔵書の多読データを含むことを申し添えておく（筆者の研究室は可能な限り多読用に開放しており、利用する学生がいるため）。

表 9 は、2024 年度に提出された読書記録を基にした 5 万語以上の読了達成者の一覧である。30 万語読了の可能性がある 5 万語、10 万語達成者を今後どう伸ばしていくか、が課題である。また、40 万語、200 万語を達成している学生は、本学で最も長く多読を継続している学生たちで、いずれも CEFR B1 レベル以上に到達している。今後のモデルケースとなることを期待している。

4. 全体考察と今後への課題・示唆

2024 年度の多読コーナー移転後、学期中はほぼ毎日、誰かが多読コーナーで読書を楽しんでいる様子を目にするようになった。場所の移転が功を奏したと言える。今後のさらなる発展のための課題として大きく以下の 2 点が挙げられる。

1. 多読未経験者・初心者に対して : 多読を始めやすい環境作り・正しい多読の指導
2. 多読経験者に対して : 多読を継続するための動機づけ・環境、YL2.0 以上の多読資料の拡充

多読で最も大切なことは、教育面からは、読む多読資料のレベルが適していること、継続的に読むこと、である。多読初心者の中には、稀ではあるが適したレベルの本を読んでいない学生や（読書記録用紙回収期日前に）短期間で一気に読む学生が見受けられる。この点は、今後対応を検討していく必要がある。現在は、多読に関する質問を随時受け付け、提出された読書記録用紙を（筆者が）確認し、軌道修正が必要な学生に連絡する形で進めているが、誤った読み方に関しては本人に（その問題の）自覚がなく本人からの質問や相談として挙がりにくい。これらの解決策として、学生同士で気軽に情報交換できる雰囲気やコミュニティができるのが望ましいと考える。インタラクションの効果により新規利用のキッカケとなるなど多読経験者の増加につながることも期待できる。

2 つ目の課題については、多読は成果が出るまでに時間を要するため、継続したいと思う／できる環境整備ならびに仕掛けの企画などが有効と考える。特に、成果が客観的に表れる目安とされる 30 万語を第一のステップとして掲げ、その達成者を増やすには、内発的動機付けのみではなく、外発的動機付けの付与も大いに効果的であろう。来年度は、多読短距離マラソンに加えて、長期的な多読マラソンなどの企画も実行したい（新規多読者にもつながる）。いうまでもなく多読資料の拡充は必須事項である。遠方に帰省する学生に長期休暇中もアクセスできる環境整備も課題である。

最後に、多読は「読書」である。教育面からの大切なこと前述したが、本質的な面から最も重要なことは、「読書を楽しむこと」である。是非、どなたでも気軽に、勉強としてではなく“pleasure reading（楽しみの読書）”として多読の絵本を手に取ってページをめくってみてほしい。

表 8　多読読了冊数

	2023年度	*2024年度
読了冊数	14,309	50,150

*2025 年 2 月 28 日現在

図 11　多読読了冊数

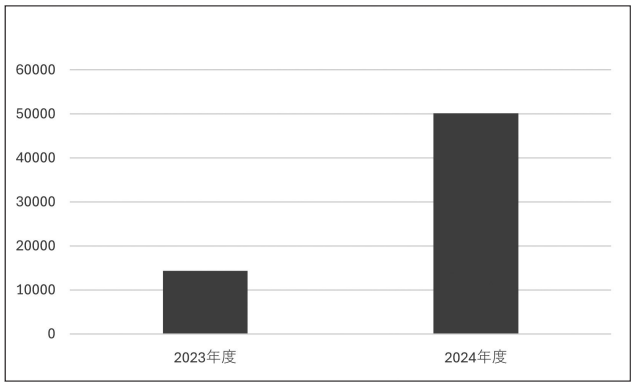


表 9　2024 年度多読読了語数達成者数（2025 年 2 月 28 日現在）

	5万語	10万語	20万語	30万語	40万語	50万語	60万語	70万語	80万語	90万語	100万語	150万語	200万語	250万語
達成人数	63	8	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0

注）2024 年度に読書記録を提出した人数 : 249 人

謝辞　本報告の執筆にあたり、多くの方々のご協力と理解の上に現在の多読コーナーが成り立っていることを改めて実感した。まずは、多読コーナー新設を承認してくださった髙田学長、渡部図書館長に感謝申し上げたい。さらに、快く図書費を差し出してくれた教員の方々、多読資料にまつわる煩雑な処理をいつも快諾し正確・迅速にこなしてくださる図書館司書の方々や図書館担当職員、その他関係者の方々にもこの場を借りて心から感謝申し上げる（図書館司書の方には本報告掲載の図書館データの提供にもご協力いただいた）。

引用文献

BNC word frequency lists. https://www.kilgarriff.co.uk/BNClists/lemma.num

Day, R. R., & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge University Press.

Day, R. R., & Bamford, J. (2002). Top ten principles for teaching extensive reading. *Reading in a Foreign Language, 14*(2), 136–141.

Effective Language Learning. Language Difficulty Ranking. https://effectivelanguagelearning.com/language-guide/language-difficulty/

藤井数馬 (2022).「英語多読学習ハンドブック：多読図書シリーズ紹介・SDGs も学べる多読図書リストとともに」長岡技術科学大学語学センター .

門田修平 (2012).『シャドーイング・音読と英語習得の科学』コスモピア.

門田修平・髙瀬敦子・川﨑眞理子 (2021).『英語リーディングの認知科学 : 文字学習と多読の効果を探る』くろしお出版 .

中田達也 (2023).『最新の第二言語習得研究に基づく究極の英語学習法』Kadokawa.

中田達也 (2024).『英語定型表現の科学』研究社 .

Nation, I. S. P., & Waring, R. (2020). *Teaching extensive reading in another language*. Routledge.

西澤一・米澤久美子・粟野真紀子 (2019).『図書館多読のすすめ方』日本図書館協会 .

Nishizawa, H., Yoshioka, T., & Fukada, M. (2010). The impact of a 4-year extensive reading program. In A. M. Stoke (Ed.), *JALT 2009 Conference Proceedings*, 632–640.

酒井邦秀 (2002).『快読 100 万語！ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫 .

髙瀬敦子 (2010).『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館 .

Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Harvard University Press.

Wray, A. (2002). *Formulaic language and the lexicon*. Cambridge University Press.